

残そう、自然の宝石箱・のりくら

くらがね通信

No.26 (秋号)

乗鞍岳と飛驒の自然を考える会

平成18年11月10日発行

当会自主事業 **=環境講演会=** のご案内

『生物多様性の危機—日本各地の状況』

飯田洋 弁護士(日本弁護士連合会、公害対策・環境保全委員)
乗鞍岳と飛驒の自然を考える会会長

日本は美しい自然景観と固有な生物相を誇ってきましたが最近、生物にとって危機的な状況にある世界のホットスポットの一つにも選ばれてしまいました。

生物の多様さは何故必要なのか、北海道の釧路湿原、鹿害が問題となっている丹沢、大台ヶ原、外来種が増え続ける琵琶湖、開発で蝕まれる沖縄まで、各地の状況を映像で眺めていきます。

その上で、多様な熱帯の生物相で知られているコスタリカでは野生生物をどのような制度で守っているのか、日本の制度は何処に欠陥があるかを皆さんと考えていきたいと思えます。

日時:11月25日(土) 午後7時より 場所:高山市民文化会館 2-5

◎ 多くの友人、知人を誘ってご参加ください

入場無料

公開講座 **自然談話室**

10月20日(金)、当会の小野木三郎副会長の講師により、『緑の回廊って知ってるかい?』と題して話をいただきました。

森林生態系を保護する為の国際生物学事業計画(IBM)や人間と生物圏計画(MAB計画)を元に林野庁は7区分の保護林を設けた。これらの保護林を結ぼうと東北の自然観察指導員の提案から生まれたのが『緑の回廊』計画。

岐阜県では白山地域に設定されているが、白山のみではなく、飛驒の各地の山々を結んでこそ本当の回廊となりうるのではないかと、『緑の回廊』の対象は国有林のみであるが、民有林にも及んでこそ本来の目的が達成されうるのではないかと。御岳は飛驒側に保護林が設定されていない。乗鞍岳は国立公園の特別保護地区とほぼ同じ地域を計画し、環境省とは別に保護しようとしている。

当会の役目としてこれらの問題点を要望書として提出することの必要性を提言されました。

自然を満喫 平湯登山道・野麦峠自然観察会

平湯登山道自然観察会 7月30日

平湯登山道自然観察会に参加して

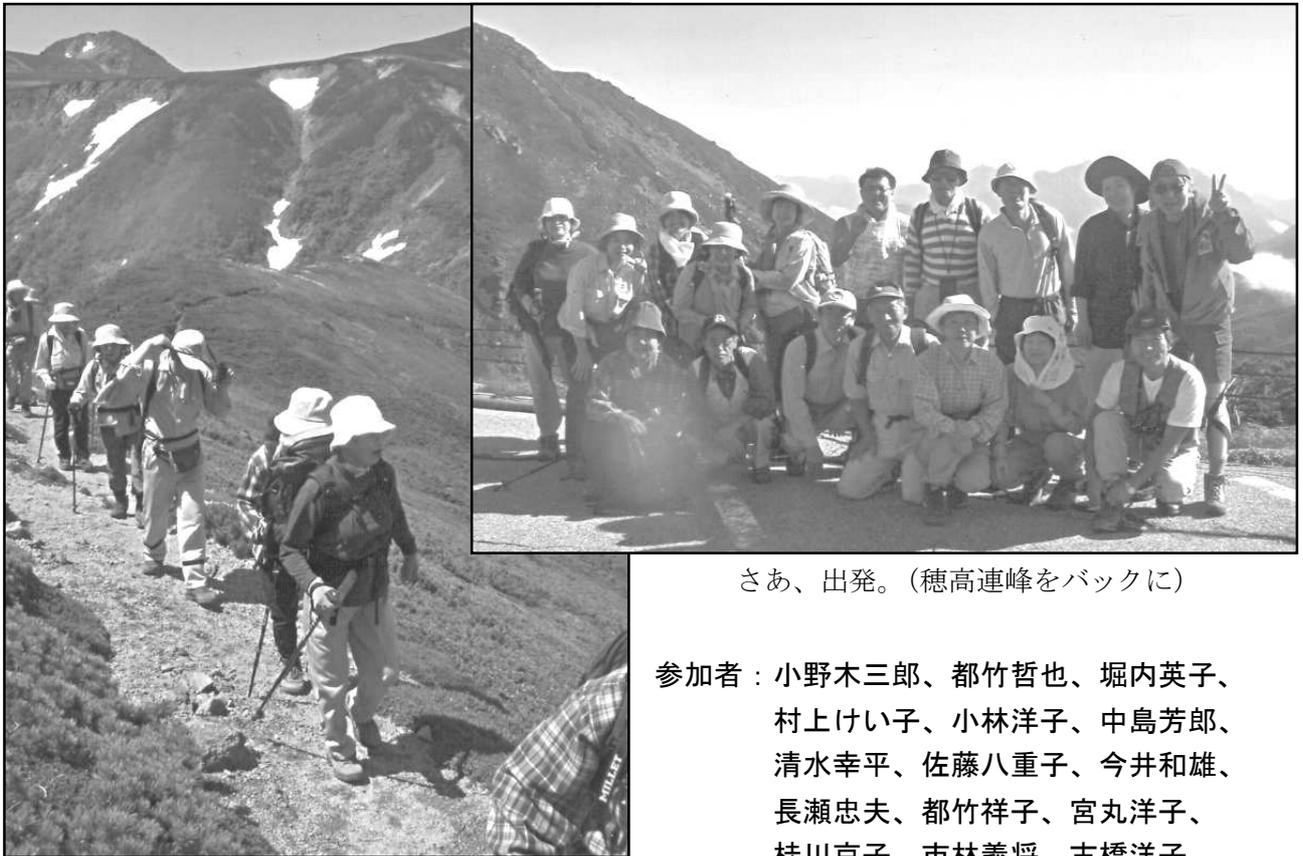
市林義将

今回の観察会は新しく開設された平湯乗鞍登山道を桔梗ヶ原下から平湯スキー場までの下山ルートでした。

当日は快晴で遠くは京都から参加された方も見えました。小野木三郎先生の解説で高山植物を、野鳥の会の直井清正さんから鳥の解説を受けました。ライチョウの姿を見ることはできませんでしたが、ホシガラスがせっせとハイマツの実を運んでいるのを見ました。私は植物に関して詳しくは分かりませんが、よく自然を観て見ると花や実の形、色、デザインも変化に富んでいて美しく、花の名前にこだわるよりも美しい、きれいと感じる心が大事だと思います。

途中、姫ヶ原という湿原のようなポイントで見たイワヒゲ。岩にしっかりとしがみつき風雪に耐えるといった様相で高山植物のしたたかさを垣間見た想いです。森林限界を過ぎダケカンバの美しい純林に入り、山の神のある所で楽しく昼食を摂った後、シラビソ、ツガの樹林帯をズンズンと歩きました。尾根筋を歩くので風通しがよく気持ちよかったです。最後のスキー場のガラガラ道はきつかったです。

この登山道は地元の有志が平湯大滝に抜ける旧道が崩壊して危険なため、新たに開設したそうですが、スキー場の道を整備して頂けたらと思います。途中、危ないところもありましたが、ケガもなく、大自然の雄大さ、植物のしたたかさに触れ心の洗濯ができました。お世話になりました小野木先生、直井さん、参加者の皆さん、どうもありがとうございました。



さあ、出発。(穂高連峰をバックに)

乗鞍を背に新登山道を歩く

参加者：小野木三郎、都竹哲也、堀内英子、村上けい子、小林洋子、中島芳郎、清水幸平、佐藤八重子、今井和雄、長瀬忠夫、都竹祥子、宮丸洋子、桂川京子、市林義将、古橋洋子、南悦子、直井清正

野麦峠自然観察会 10月15日

小学生1名を含む21名で快晴の野麦峠に向かいました。女工哀史の舞台ともなった冬の峠越えの厳しさを想像しながらの観察会でした。頂上近くまではドイツトウヒやカラマツの植林地で紅葉は期待できず、地藏堂近くでようやくブナやカエデの紅葉に歓声が上がりました。でもナナカマドは茶色に変色しイマイチでした。「小野木さんのダジャレが移ってしまった。」と言う参加者もあり楽しい観察会になりました。(直井清正)

参加者：小野木三郎、杉崎妙子、打保恵子、佐藤八重子
坂下行雄・昭子、藤島美智子、桂川治郎・ゆき、
都竹祥子、小林洋子、南悦子・こうき、森敏子
清水幸平、古屋敷稔、森敏子、直井清正・一希
鈴木久江、三室啓子、市林義将



落ち葉で遊ぼう

のむぎとうげ

山王小2年 みなみこうき

のむぎの山からおりて、ジュースをかいに行ってそれからしゃしんをとりました。ぼくは、おばあちゃんにおつりをわたそうとしたら10えんをおとしてしまいました。それで3分間さがしました。なのでバスにのるのがすこしおくれました。ぼくはバスの中でねようかなと思ったら30分くらいさくてねれませんでした。のむぎとうげの山は、きつとところもあつたけど学ぶことがいっぱいありました。

きのこのしゅるいをぼくは10しゅるいか9しゅるい見ました。どうぶつの足あとも見ました。ぶどうのにおいのするはっぱがありました。いいぶどうのにおいがしていまにもぶどうがたべたくなりました。かえりみちはのぼりぎかでもないしくだりぎかでもないしふつうのみちだからくでした。かげがあつてちよつとさむかつたけどくでした。ぼくはおばあちゃんに1時間かかるといわれてびっくりしました。バスのなかでぐつすりねました



お疲れさま。(乗鞍展望スポットで)

乗鞍岳のライチョウの現状

日本野鳥の会 岐阜県支部長
乗鞍岳ライチョウ保護推進委員
大塚 之稔

乗鞍岳は、富山県の立山について最も多くライチョウ調査がされている山岳であると思います。乗鞍スカイラインがオープンした1973年に岐阜県ライチョウ保護研究会が全山調査を行ったのが最初で、私は大学生として参加し、飛騨からは直井清正氏（乗鞍岳と飛騨の自然を考える会副会長）や老田正夫氏（老田酒造社長）などが参加されたことを覚えています。その後、岐阜県、日本野鳥の会岐阜県支部、信州大学等が調査を行って来ました。最近の調査としては、2003年から3年間、岐阜県がアセス会社に委託して行ったもので、乗鞍環境保全税を利用したものと聞いています。

今年8月に静岡市で第5回ライチョウ会議大会が開かれ、この調査結果を県の許可を得て発表する機会を持つことができましたので、紹介することにします。また、前回の全山調査（1994年度岐阜県支部が県の委託で行ったもの）と比較したいと思います。

〈調査方法〉

1994年の調査に合わせて全山を10（A～J）に区切り、3ヶ年をかけて、それぞれの区域ごとにナワバリ形成期と育雛期のライチョウの生息状況を調べています。

	調査範囲	調査期間（調査人数）＊補足調査
2003(平成15)年度	C 畳平 D 大黒岳 E 不消ヶ池 F 五ノ池	6/23-6/24 (6) 6/27-6/29 (4) 7/5-7/8 (5) 7/29-7/31 (4)
2004(平成16)年度	A 猫岳・四ツ岳 B 桔梗ヶ原・ 大丹生岳・硫黄岳 D 大黒岳	6/27-7/2 (9) 7/20-7/22 (3) 8/2-8/4 (6) ＊8/28-29 (2) ＊9/3-9/4 (2)
2005(平成17)年度	G 摩利支天・肩小屋 H 権現池 I 大日・屏風 J 剣ヶ峰・高天	6/25-6/27 (7) 7/2-7/5 (5) 7/20-7/23 (6) ＊9/14-9/16 (2)

〈調査結果〉

	調査地域	2003－2005年調査			1994年調査				
		ナワバリ	アブレ 雄(羽)	計 (羽)	ナワバリ	不確定 ナワバリ	放浪雄 (羽)	アブレ 雄(羽)	計 (羽)
A	猫岳・四ツ岳	5	0	10	4	0	1	0	9
B	桔梗ヶ原・大丹生岳・硫黄岳	7	5	19	2	1	0	0	5.5
C	畳平	3	0	6	2	1	0	0	5.5
D	大黒岳	2	1	5	3	1	0	6	13.5
E	不消ヶ池	6	0	14	6	3	0	1	17.5
F	五ノ池	2	1	5	2	0	0	1	5
G	摩利支天・肩ノ小屋	5	2	12	7	2	5	0	22
H	権現池	4	0	8	3	0	1	0	7
I	大日・屏風・皿石ヶ原	2	2	6	2	2	1	0	8
J	剣ヶ峰・高天ヶ原	4	4	12	6	1	3	0	16.5
		40	15	95	37	16.5	11	8	109.5

2003-05年調査では、全山の生息数を95羽と推定しています。これは、過去の調査において最も少ない生息数でした。ナワバリやアブレ雄の扱い方は若干異なりますが、1994年度調査では約110羽と推定していますので、単純に15羽の減少です。また、1973年調査では約120羽、1983年調査では約130羽と推定していますので、年々減少していることは明らかです。

日本のライチョウは世界に分布するライチョウの南限にあたり、しかも分布域の端にあたる個体群が絶滅しやすいと言われていています。白山のライチョウが絶滅したように乗鞍岳や御岳の個体群が危ないという学者もいます。地球温暖化の問題もあります。ライチョウをトキのようにしないため、何をしていくことが大切か考えていかななくてはなりません。

山岳巡礼 乗鞍岳 (3,026m) その2

富田令禾

乗鞍は勿論休火山だが、地質学者に言わせると、南北に長大な山形になっているのは南北で最古の烏帽子火山を第一陣に順次南方へ鶴ヶ池、摩利支天、一之池、(権現池)と噴火しその度に各外輪山の部分的破壊が行なわれ、更に便乗的に四ツ岳、亀ヶ池、十石、高天原などの寄生火山が噴いて現在の如き複雑な山貌を描いたものだそうである。

この噴火活動は有史前であるにしてもいつごろ休止したか、文献が無いので明らかでないが、「続日本後紀」の七に、

承和五年九月(丙辰朔)甲申、從七月至今月、河内、參河、遠江、駿河、伊豆、甲斐、武蔵、上総、美濃、飛驒、信濃、越前、加賀、越中、播磨、紀伊等十六国、一々相續言。有物如灰、從天而雨、累位日不正、但雖似怖異、無有損害、今茲畿内七道、俱是豊稔、五穀価賤、老農名此物米華云。

とあるのと、「日本紀略」の同年の条に、「癸酉、有物如粉、從天散零、逢雨不消」とつづいて「乙亥、東方有声、如伐太鼓」と、又其他の類似の文献を総合考証して、当時の記録や世情から推して富士山の噴火ではなく、世を離れた深山中の爆発と思われ、従って所在地も山名も明記する可能性も必要もなかったものとし、その降灰区域や折柄の木曾路の官道の地異による崩壊と再開の変更路程の様子などから本州中部の御岳か乗鞍であろうと、郷土史家の岡村利平翁や嘗ての高山測候所長の山沢金五郎氏等が其研究を発表されたことがある。然し私はいろいろの角度から乗鞍重点説には疑義をもち、むしろ御岳でないかと反論したのであるが、果たしてどんなものであろうか。

もしこの承和五年に乗鞍がなお活動していたとすれば今からおよそ千九百年前のことである。けれど江戸時代に入ってもなお頂上付近は猛烈な硫黄くさい流煙が立ちこめて幕府の命による雷鳥捕獲の役人共を悩まして遭難せしめたり、明和二年には岳の西麓の一部が爆発して広範囲の大泥流押し出しの記録もあるから、相当近頃まで余憤を洩らしていたらしい。

承和五年から三十六年後の貞観十五年に飛驒の愛宝(あは)山に紫雲が三度現われたという国司からの報告が「三代実録」に出ているが、乗鞍は初め「あは山」と言っただけだったので、紫雲というのも噴煙の反射光による彩雲で、普通の雲とは当時の人々にでも識別され、異変と写ったかトップニュースとなって中央官庁へ伝えられたものらしい。

乗鞍の周回地域は上古には阿拝(あは)郷と言ったが、山名もこれに因むものかもしれないし、紫雲の瑞祥から紫は位階では最上級のものであるので又、位山といわれるなどの説もあり、語音の転訛から久良山、鞍山、乗鞍となったなどなど話は混線していくが、煩雑を避けて今は割愛することにしたい。

(続く)

名古屋営林局誌「みどり」昭和30年(1955)1月号掲載
(許可を得て抜粋転載、一部現代語に変換)

乗鞍展望お勧めスポット

(番外編)

新高山市 100 景

『くらがね通信』の No15(平成 16 年 1 月 20 日発行)から前号 No25 まで、10 回にわたりこのコーナーを掲載しましたがその間に、平成 17 年 2 月 1 日に旧高山市と周辺 9 町村が合併して新たな高山市となりました。その合併記念事業として『新高山市 100 景』を募集し、応募された 220 景の中から 100 景が平成 18 年 2 月に決まりました。

この中にはこれまでこのコーナーで取り上げた風景も含まれています。また、展望ではないですが乗鞍地域の景観も入っていたので、今回それらを取り上げてみます。

■ 主に展望に関するもの

- ・江名子町より望む乗鞍岳(高山)
- ・夕焼けの乗鞍岳(高山)
- ・朝の乗鞍岳(高山)
- ・桔梗ヶ原より望む乗鞍烏帽子岳(丹生川)
- ・十二ヶ岳付近より望む乗鞍岳(丹生川)
- ・桃源郷(久々野)
- ・船山山頂道路より望む乗鞍岳(久々野)
- ・野麦峠より望む乗鞍岳(高根)

- ・日和田高原から望むレンゲツツジと乗鞍岳(高根)

- ・野麦峠の池より望む乗鞍岳(高値)

■ 乗鞍地域に関するもの

- ・乗鞍青屋登山道太郎之助みち(朝日)
- ・布引滝(丹生川)
- ・五色ヶ原の森雄池(丹生川)
- ・若葉の平湯大滝(上宝)
- ・平湯峠平湯側(上宝)
- ・紅葉の平湯峠(上宝)

上記の 16 景で 100 景のなかで最も多く選出されていて、高山市民にとって乗鞍岳は高山市を表す大事な景観というだけでなく、シンボルということが分かります。

ちなみに乗鞍岳に次いで多く選出されているのは、御岳で 7 景が入っています。

※ 新高山市 100 景については高山市のホームページでご覧になれます。

高山市→行政情報→基盤整備部都市整備課→新高山市 100 景

<http://www.city.takayama.lg.jp/toshiseibi/100keitop.html>

会員状況

平成 18 年 10 月末会員数 個人・家族 148 名 ・ 団体 4 団体

■ 会員を募集しています！ 年会費 = 個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円

あなたの知人、友人に

・ 郵便振替 00800-8-129365

入会をおすすめください

・ 振込先 乗鞍岳と飛驒の自然を考える会

くらがね通信 第 26 号 (秋号) 平成 18 年 11 月 10 日発行

発行者 乗鞍岳と飛驒の自然を考える会 〒 506-0055 岐阜県高山市上岡本町 4-218-3 飯田 洋

TEL 0577-32-7206 ・ FAX 0577-32-7207

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者 : 宝田 延彦 E-mail : nobu1995@peach.ocn.ne.jp TEL(FAX 兼) 0577-34-1287

■ 編集者 : 住 寿美子 TEL 0577-34-7237

表紙写真提供 : 小池 潜

印刷 : アドプリンター